

# 霞

— 2022年度春季展示室だより —

土浦市立博物館  
令和4年5月14日発行(通巻第57号)

当館では「霞ヶ浦に生まれた人々の暮らし」を総合テーマに、春(5~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞(かすみ)」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

## 古写真・絵葉書にみる土浦(57) 古写真「真鍋通り」



明治40(1907)年頃の真鍋宿通りです。真鍋十字路から坂上方面を望んでいます。右側には木造の火の見櫓と消防機械置き場がありました。正面の高台には総宜園そうぎえんの建物が見えます。現在の愛宕神社あたごの境内にあたり、真鍋・土浦・霞ヶ浦が一望できる桜の名所(公園)でした。昭和9(1934)年の国道開通により、中央部が削られ、公園はなくなりました。

【情報ライブラリー検索キーワード「城址と公園」】

### 目次

○古写真・絵葉書にみる土浦(57) . . . . .	1
○博物館からのお知らせ . . . . .	1
○家臣団を強化する(近世) . . . . .	2
○瓦硯(近世) . . . . .	3
○祭礼の準備(近世) . . . . .	4
○真鍋幼稚園(近代) . . . . .	5
○市史編さんだより . . . . .	6
○土浦藩土屋家の横顔 . . . . .	7
○霞短信「土浦市立博物館での仕事」 . . . . .	8
○コラム(57) . . . . .	8
○情報ライブラリー更新状況 . . . . .	8

## 博物館からのお知らせ

★★はたおり体験★★ ※要予約です。詳細はお問合せください。

さき織り(裂いた古布をよこ糸に使う織り方)を体験します。

日程: 5月28日、6月4日・11日・18日・25日、7月2日(いずれも土曜日)

★★無料開館★★ 5月15日(日)・18日(水)

国際博物館の日にちなみ、無料開館します。

★★土浦ミュージアムセミナー★★ 6月11日(土)・18日(土)

土浦地域の歴史について、学芸員が研究成果をお話します。

### ※長期休館のお知らせ

大規模改修工事を行うため、2022年7月4日(月)から、博物館を長期休館いたします。再開館は2024年1月ごろを予定しております。

休館期間中、土浦城東櫓(博物館付属展示館)は開館しております。ご利用の際は、博物館ホームページにて開館日をご確認ください。

※第1駐車場は、工事車両などが利用するため、休館中は利用できません。

土浦城東櫓 TEL: 029-824-0028

### ★休館日のお知らせ★

- ・毎週月曜日
- ・5月10日(火)~13日(金)
- ※5月10日~13日の間は、東櫓を無料開放しています。

- 時間: 両日 10:00~12:00
- 場所: 博物館視聴覚ホール
- 受講料: 50円(資料印刷費)
- 定員: 30名
- 申込方法: 電話予約
- 申込開始日: 5月17日(火)



博物館マスコット  
亀城かめくん

# 家臣団を強化する

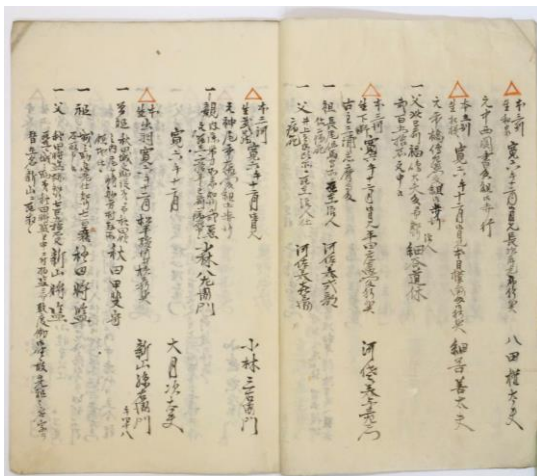
## —寛文・延宝期の家臣帳—

土浦藩土屋家初代当主の数直は、寛文2（1662）年に石高1万石を有する大名となり、そののちも石高の加増を受けました。同9年には、幕府から土浦城を与えられたことで土浦藩主となります。旗本から大名に昇進し、度重なる石高の加増を受けた数直にとって、土屋家を支える家臣団の強化は必須でした。今回紹介する「寛文延宝被召抱候面々由緒書」（以下、「由緒書」）は、寛文2年から延宝5（1677）年までに土屋家の家臣となった藩士103名の名前と、その来歴を記した家臣録です。

「由緒書」には新たに藩士となった者の名前とともに、本国（先祖の出生地）と生国（生まれ育った場所）、土屋家当主（数直）に御目見をした年、御目見以前の経歴、先祖の名とその経歴などが記されています。まず、各藩士が数直に御目見をした年代を確認してみましょう。表は「由緒書」に記された御目見年代とその人数をまとめたものです。これによれば、数直が1万石を得た寛文2年には、6名の藩士が御目見をしたことが明らかとなります。また、寛文6年は26名、同9年は19名と、この2年が突出して多いことが特徴です。

寛文5年12月に幕府老中となった数直は、翌年7月に2万石の領知が与えられると、それまでの石高1万5千石と合わせ、3万5千石の大名となります。老中への就任と、急増した領知・石高を管理するために、多くの藩士を抱える必要があったと考えられます。一方、寛文9年6月になると、数直は1万石の領知が加増されたほか、居城として土浦城を与えられます。居城を持たず陣屋を利用する大名から、城持大名となった数直は、さらに多くの家臣を抱える必要に迫られた結果、新たに19名の家臣を抱えたと考えられます。

数直の時代に新たに抱えられた藩士の多くは、自身や親の代に徳川家康や各地の大名家に仕えていたものゝ浪人（浪人）となった、という来歴が記されています。領知が増加した時期の数直を支えた新たな藩士は、新たな仕官先を探し求めて各地から集まってきた人々でした。（西口正隆）



寛文延宝被召抱候面々由緒書（個人所蔵）

表 御目見の年代と人数

年	人数	出来事
寛文2年	6	1万石の大名になる
寛文3年	3	
寛文4年	6	
寛文5年	3	老中になる(12月)
寛文6年	26	加増され3万5千石に(7月)
寛文7年	9	
寛文8年	3	
寛文9年	19	土浦城主となる
寛文10年	1	
寛文11年	1	
寛文12年	3	
延宝元年	5	
延宝2年	3	
延宝3年	3	
延宝4年	3	
延宝5年	2	
不明	7	



春季展示では館内での解説会は行いません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しております。

- 朽木伊予守様より土浦御城御引渡帳写（個人所蔵）
- 鉄黒漆塗三石紋仏二枚胴具足（当館所蔵）



がけん

# 瓦硯

— 学者に愛された出土品 —

文房とは学者や文人の書斎を意味し、そこで用いる道具のうち、特に大切な筆・硯・紙・墨を文房四宝といいますが、なかでも硯は、墨を磨りおろすだけでなく、工芸品として鑑賞の対象になることもありました。

屋根瓦で作った硯は瓦硯、または「かわらすずり」と呼ばれます。瓦硯の歴史は石製のそれより古く、無釉のざらざらした表面が墨を磨るのに適しているとして硯に転用されました。

今回ご紹介する瓦硯は、もとは新治廃寺跡（筑西市）から出土した軒丸瓦（軒先を飾る丸い瓦）です。創建時の瓦と推定されるもので、「鋸歯文縁複弁八葉花文軒丸瓦」と呼ばれ、蓮の花を模した文様で、花びらが2枚1組となっています。

新治廃寺は、奈良時代に律令制のもとで地方豪族により造立された、伽藍を備える寺院でした。東塔、西塔、金堂、講堂の基壇や礎石が発掘調査で確認され、遺跡は国指定文化財（史跡）に指定されています。江戸時代から、古い瓦が出土する場所として注目されていました。その瓦のひとつが美しい模様を残したまま、裏面を州浜型に彫りこみ、硯に仕立てられました。

古い瓦への関心は、特に江戸時代の学者や好事家の間で高まりました。土浦の町人で国学者でもあった色川三中（1801～55）は、出土品に関心を寄せ、学者同士のネットワークを通じて情報を集めていました。三中の随筆「野中廻清水」には、こうした記録が残されています。また、小田村（つくば市小田）の名主であった長島尉信（1781～1867）は、出土した古瓦を集めて拓本を作りました。尉信の肖像には机の上に、瓦の拓本を表紙に用いた冊子が置かれています。

専用の箱に入っていたことから、瓦硯は大切にされていたようです。持ち主は箱に「抱甕齋」と署名をしていました。「抱甕」とは中国の古典『莊子』に典故を持つ言葉で、重い甕を抱きながら畑に水を撒く、という意味があり、鈍重であっても地道な努力を積み重ねていく生き方を指しています。「抱甕齋」が誰なのか判明はしていませんが、自らの足で資料を集め常総地域の歴史を解明しようと努力をつづけた三中や尉信らの姿が透けて見えるようです。

（木塚久仁子）



硯面



瓦の文様

瓦硯（当館所蔵 奈良時代の瓦を江戸時代に転用）



春季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。いずれも近世コーナーに展示しています。

- 金蘭集（当館所蔵）
- 長島尉信肖像（当館所蔵）



# 祭礼の準備

## —江戸時代の日記から—

江戸時代の土浦城下では、6月12～13日にかけて祇園祭が行われ、当番となった町組が出し物をして祭りに華を添えました。ここでは、田宿町（大手町）の国学者、色川三中と弟美年の兄弟が記した日記「家事志」のなかから、天保5（1834）年の祭礼準備の様子を見てみましょう。この年は田宿町が当番でした。

美年は祭礼にあたり、高張提灯を町内に寄進することを思い立ちます。文化13（1816）年の大火で薬種店が全焼、醤油蔵が類焼したため色川家は大打撃を受けました。それからおよそ18年を経て、兄弟の尽力により家業は好転しつつありました。そこで美年は、この間には行えなかった高張提灯の寄付を思いつきました。じつはこの年、美年は祭礼の実行を担う「若衆」への加入を求められていたのですが、美年はこれに加わりませんでした。周囲から求められた負担を断ったことになるため、寄付にはその穴埋めの意味合いもありました。

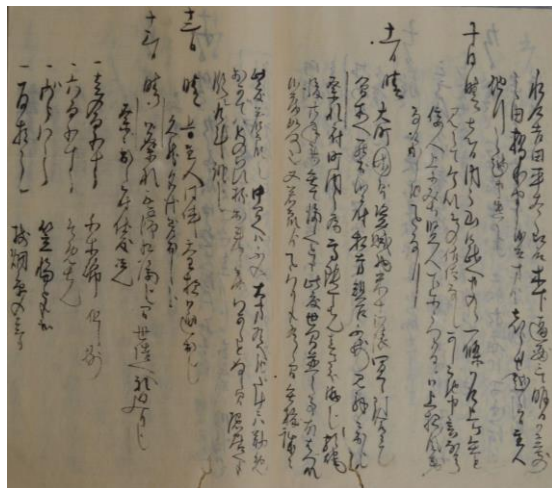
また、この年の祇園祭の世話人たちは、町内で「出し」（山車）を拵えたい旨を大店に申し出てきました。三中はこの件について、次のように日記に綴っています。

大方拾五六両もかゝり可申、しかし彼是いたし候ハ、此時節柄四五十金もかゝり可申、甚不<sub>はなば</sub>宜<sub>だ</sub>事<sub>し</sub>可<sub>から</sub>歎<sub>ざ</sub>事<sub>る</sub>なから誰も誰も先二立候事いとひ而申もの無之其意二おし付られ候、此凶年柄誠二心得不<sub>こころ</sub>申<sub>え</sub>事共と相<sub>あ</sub>歎<sub>い</sub>申候（天保5年5月28日条）

時節柄、40～50両もの莫大な経費がかかるのではないかと危惧しつつ、誰も矢面に立つことを嫌がって反対できなかったこと、凶作の年に誠に心得違いであることを嘆いています。当時は米価が高騰し、6月2日には東崎町の百姓たちが米穀積み出しの船を差し押さえる騒動も起きていました。不安な世情のなかでの祇園祭であり、そこには様々な思いが錯綜していたようです。

結局、この年の田宿町の祭礼経費は70両余りに及び、そのうちの半分を田宿町内の大店が負担しました。負担の最も大きかったのは醤油醸造を営んでいた国分勤兵衛家で15両となり、色川家でも2両3分を負担しています。この他に色川家では、前述の高張提灯の代金、さらに祭礼に参加するための衣装として、揃いの着物を整えるための白木綿とその染め賃、揃いの煙草入れ代なども出費しました。

今も昔も祭礼には多額の費用がかかります。色川兄弟の記した日記は、祭礼準備に係る経費を把握できる記録となっています。それと同時に、色川家をとるまく人間関係やつきあいのなかで、どのようなことに心を砕いていたのか、その内実を教えてくれる貴重な史料でもあります。（萩谷良太）



家事志 九

（天保5年6月、当館所蔵、茨城県指定文化財）



春季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近世コーナーに展示しています。

- 「土浦御祭礼之図」（当館所蔵 土浦市指定文化財）
- 「墨僊漫筆之稿」（個人所蔵）



# 真鍋幼稚園

—土浦市域にあった昭和2年開園の幼稚園—

博物館ではこれまで、明治18（1885）年に茨城県で最初に開園した土浦幼稚園の歴史について、残された資料を通してたびたびご紹介してきました。土浦幼稚園は土浦町（昭和15年より土浦市）が、土浦小学校の付属の、公立幼稚園として開設したもので、土浦の幼児教育を支えてきました。今回は、土浦市合併前の真鍋町に昭和初期に開園した、キリスト教系の私立幼稚園「真鍋幼稚園」についてご紹介します。

昭和2（1927）年、真鍋幼稚園は、<sup>かんたつみつ の すけ</sup>神立三津之助園長により真鍋町、現在の関東鉄道本社（真鍋一丁目）近くに開園しました。写真①中央の丸眼鏡をかけた男性が神立園長です。園長はクリスチャンで、<sup>うちにしちよう</sup>内西町（中央一丁目）にある聖バルナバ教会（明治35年創立）に所属していました。真鍋町で薬局を営んでいた<sup>くじらい</sup>鯨井芳子さん（昭和6年生まれ、昭和11年入園）によると、園舎には西洋画が飾られ、朝のお祈りがあり、賛美歌をうたい、フレーベル館の教材を用いた教育を受けたそうです。塗り絵やお絵描き、外遊び、クリスマス会も楽しいイベントでした。昭和9年12月23日付のいはらき新聞は、土浦地方のクリスマスが、23日の真鍋幼稚園を皮切りに25日に聖バルナバ教会、26日には前川町（中央二丁目）のフレンド教会で行われたことを報じています。写真②のクリスマス会では、園長がサンタクロースの扮装をしているようです。

神立園長の娘である後藤<sup>つねこ</sup>常子さん（昭和7年生まれ、昭和11年入園）によると、真鍋幼稚園は2年保育で、「愛」と「光」の2組があり、1組20～30名ほどの男女が在籍していたそうです。また、園児には商家や勤め人の子供もあり、卒園児たちの多くは真鍋小学校へ入学しました。後藤さんの手元に残る写真は、昭和17年当時もクリスマス会が催されたり、昭和19年3月にも修了記念写真が撮影されるなど、戦時下でも休園することなく、幼児教育が継続されたことを物語ります。

戦後は「真鍋保育園」となり、平成3（1991）年3月、後藤さんが3代目園長のとき、惜しまれながら閉園しました。昭和2年の創立以来、実に4,554名の園児を送り出しました。真鍋幼稚園の写真は、後藤さんから博物館にご寄贈いただく予定です。  
(野田礼子)



①第11回保育満了記念 昭和13年（個人所蔵）



②クリスマス会 昭和8年（個人所蔵）



春季展示では館内での解説会はありません。左のQRコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。

いずれも近代コーナーに展示しています。

- 真鍋幼稚園児の自由画帳 昭和12年頃（個人所蔵）
- 真鍋幼稚園児のヌリエ帳 昭和12年頃（個人所蔵）



## 市史編さんだより

### 好物「醬」を贈る — 『長島尉信来翰集』 —

小田村（つくば市小田）の名主から水戸藩や土浦藩の検地事業などで活躍した長島尉信は、<sup>昔きやどほん</sup>関宿藩の家老を勤めた船橋随庵からも信頼される知識と探究心を持ち、生涯を通じて古文書や書物を研究した人物でした。その尉信のもとに届いた書状を集めた『長島尉信来翰集』が伝わっています。尉信のもとに届いた書状から、どのような素顔をみることができるでしょうか。

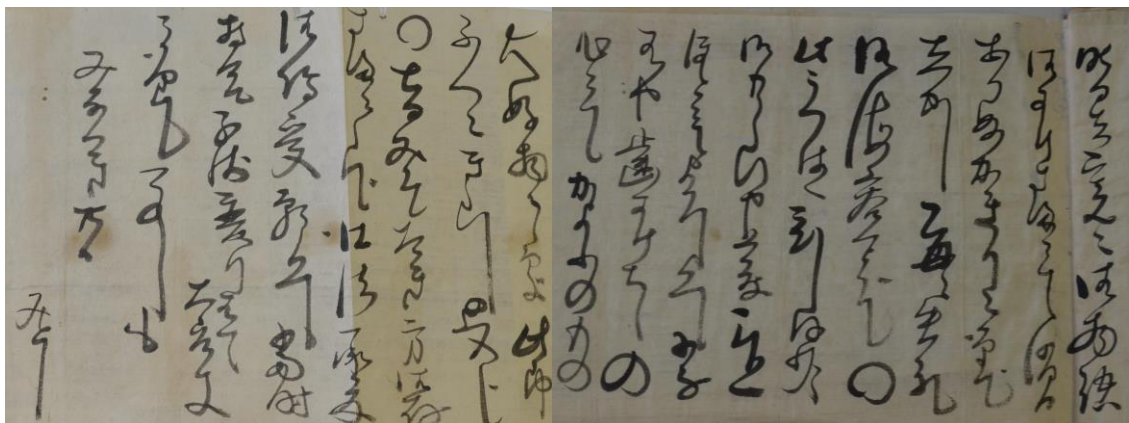
今回取り上げるのは、醤油醸造業や薬種業を営みながら国学などの研究を続けた色川三中や、<sup>いろかわみなか</sup>薬種業を継いだ三中の弟美年からの書状です。<sup>そとにしちよう</sup>外西町の長屋に住んでいた尉信は、弘化3（1846）年の洪水の時に、<sup>た</sup>田宿町の美年の家に避難して居候していました。その間に生まれた美年の女兒に、尉信は自分の名前の一字をとって「信」と名付けました。美年の子どもたちを交えた家族ぐるみの付き合いだったといえます。

ここでは「醬」に注目してみましょう。「醬」は、『広辞苑（第四版）』では、「なめ味噌の一種で、小麦と大豆で作った<sup>こうじ</sup>麴に食塩水を入れ、塩漬けの茄子・瓜などを加え、十日間位かきまぜて熟成させたもの」です。実際に尉信が食べていたものは不明ですが、美年の家族や、三中の末弟忠三郎の好物であったようです。

美年の書状（6月20日付 『長島尉信来翰集』 No.106、以下「No.106」と略す）では、器を届けて「この器に醬を少し貰いたい。子どもが大好物なのだが、ちょっと切らしてしまっていて困っている」と書かれています（写真）。22日の書状（No.97）では「尉信から沢山の<sup>しじみ</sup>蜆をもらった上に、昨日お願いした醬もすぐに届けてもらった。毎日美味しいものばかり貰っていると、妻もお礼を言っている」とあります。7月9日の書状（No.101）でも、「一昨日は醬を沢山もらった」と美年はお礼を述べています。また、三中の書状（No.55）でも「忠三郎の好物の醬をもらい、かたじけない。忠三郎も快方に向かっており安心して欲しい」と書かれています。体調を崩した三中の末弟忠三郎も、尉信から貰った大好物の醬を食べて回復したようです。

美年の子ども達や忠三郎が喜んで食べている姿を思いながら、届ける器に醬を入れている尉信の姿が想像できます。手紙を読んで早速届ける準備に取りかかっている、そんな光景です。難しい古文書や書籍、和歌の添削をして、険しい表情を浮かべる尉信ではなく、温かい心遣いをみせる尉信の一面が垣間見えるようです。

（市史編さん係 江島万利子）



『長島尉信来翰集』 No. 106 色川美年書状

# 土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には「土浦土屋家系譜」(『茨城県史料 近世政治編Ⅲ』所収)を用いました。ゴシック体部分が引用です。



## その十一、土屋 挙直【つちや しげなお】

余七麿 実水戸中納言源齊昭卿十七男 実母家女仁科氏  
嘉永五(1852)年壬子九月十九日於小石川水戸殿館誕生

■ 土屋寅直の養子となる 文久三(1863)年八月廿五日養父采女正寅直養子(中略)同年九月十日徙居于在所土浦発駕

挙直(余七麿 1852~92)は、水戸藩主徳川斉昭の十七男として江戸小石川の上屋敷で生まれました。斉昭は20人を超える男児に恵まれ、多くが大家の養子になりました。七男がのちに十五代将軍となる徳川慶喜(幼名 七郎麿)です。挙直も文久3年、数え12歳で土屋家の養子に入りました。養父寅直には男児が3人いましたが、いずれも6歳になる以前に亡くなっていました。

■ 新政府に付くか、旧幕府に付くか 戊辰(1868)四月五日、養父寅直、從京師 御召ニ付為名代上京 慶応4(1868)年1月3日、戊辰戦争が始まると、同月15日には新政府によって王政復古が各国に通告されました。2月9日には有栖川宮熾仁親王が東征大総督となり、同月12日には徳川慶喜が上野の寛永寺に閉居を命じられました。これに対し、結城藩主・土浦藩主・古河藩主・牛久藩主・下妻藩主らは連署して、慶喜への緩やかな処置を願い出ました。常陸国の各藩主らは、新政府に従うか、旧幕府に付くかの決断を迫られ、谷田部藩や宍戸藩が新政府へ恭順の意を示しましたが、結城藩では藩主水野勝知が彰義隊を率い、結城城を新政府恭順派から奪還するなど、各藩の対応は分かれました。土屋家は4月3日に寅直・挙直が連署して勤王証書を東海道先鋒総督府へ提出しました。明治政府へ恭順の意を示すため、挙直は寅直の名代として同月5日、土浦城を出発して京都へ向かいました。

■ 進軍中の有栖川宮と遭遇 (慶喜と)骨肉之間柄謹慎可罷在処上京如何

京都に向かう途中、挙直は江戸へ進軍する有栖川宮と小田原で遭遇しました。「閉居の慶喜と兄弟なのだから謹慎すべきところ、上京するとは何事か」と詰問され、箱根山中の満願寺という寺に入るよう命ぜられました。当時17歳であった挙直はどれほど心細かったことでしょうか。天皇への誠意を示すため病気の藩主寅直の名代として上京する旨を、同行していた家臣鈴木内匠が丁寧に答え、ようやく旅行の再開が許されました。閏4月1日、京都に到着した挙直は参内し、同月10日に誓約の儀が執り行われました。5月3日、寅直は病気を理由に隠居し、6日に挙直が土浦藩主に就任しました。

この月19日には彰義隊が壊滅し、新政府軍は関東の掌握に成功しました。7月19日には江戸は東京と改称され、翌明治2(1869)年3月、挙直は版籍を奉還し、同年6月に土浦知藩事に任命されました。

(木塚久仁子)

このコーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動の記録などをお伝えしております。

今号は、昨年度まで当館の会計年度任用職員として勤務していたこばやしなおき小林直輝さんに寄稿していただきました。

## 土浦市立博物館での仕事

令和4年の3月までの1年間、土浦市立博物館の会計年度任用職員としてお世話になりました。仕事は主に民俗資料の整理を担当しました。具体的には資料の名前、材質や大きさ、用途などを記録する台帳の作成などを行いました。

また、校外学習参考展示「昔のくらしの道具」にも携わりました。特に「くらしの道具を作る」と題した一連の展示については、多くの方々に手助けしていただきながら、テーマと資料の選定、キャプションの作成、展示のレイアウトなどを中心に担当しました。「くらしの道具を作る」は職人が使った様々な道具を通して、桶や下駄など、くらしの中で使われた道具がどのように作られたのか解説する内容でしたが、特殊な道具の数々について私自身勉強し、理解を深めながら展示を手がけました。

その際には、過去に作られた台帳に大変助けられました。台帳から道具の使用者や使い方が分かったことで、道具の製作過程に沿った展示を作ることができたと考えています。台帳の作成をはじめとした資料整理の仕事は、通常来館者の皆様の目に止まる機会は少ないかもしれませんが、地道な資料整理の仕事こそが展示を作り上げる基礎となることを、土浦市立博物館での仕事を通して身をもって学ぶことができました。

私は今年の4月から宮城県の東北歴史博物館の学芸員となりました。これまでとは環境が異なるだけでなく、資料整理の他にやるべき仕事の量も格段に増え、不安を覚えることも少なくありません。しかし、博物館としての根本が資料にある点は共通であると考えます。土浦市立博物館で学んだことを大いに生かして励んでまいります。

(東北歴史博物館学芸員 小林直輝)

## コラム (57) 戦後70年「市民の記憶」収集事業

令和3年度は、戦後70年「市民の記憶」収集事業(2015年開始)の最終年度にあたりました。事業では、戦争体験に特化した聞き取り調査、『土浦の人と暮らしの戦中・戦後』(2019)・『戦争の記憶マップ』(2021)の刊行を進めました。また、夏には「戦争の記憶を語る」パネル展や「戦争体験のお話をきく会」を開催し、テーマ展「戦争の記憶」(2015)・特別展「町の記憶」(2019)では、関連資料を公開しました。

長引くコロナ禍の今感じるのは、聞き取り調査が、コロナ以前に進められたことは幸いだったということです。マスクを着け三密を避けることがスタンダードな昨今、ご高齢の方にお会いし、じっくりお話を伺うことがなんと難しいことか。当時は考えも及びませんでした。さまざまな制約を抱えながらも、昨年度は、聞き取り音声を活かした「音声作品」と、新規撮影による「映像作品」の制作を進めました。

「戦後」を語る一方で、世界では今まさに戦争がおこっています。戦争と平和について繰り返し考えるきっかけとなる情報を、発信し続けたいと思います。

(野田礼子)

## 情報ライブラリー更新状況

【2022・5・14現在の登録数】

古写真 602点(+1)

絵葉書 514点(+1)

※( )内は2022年1月5日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは、画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

※新型コロナウイルス感染予防のため、一部ご利用を制限しております。ご了承ください。

## 霞(かすみ) 2022年度

### 春季展示室だより(通巻第57号)

編集・発行 土浦市立博物館  
茨城県土浦市中央1-15-18  
TEL 029-824-2928  
FAX 029-824-9423  
<http://www.city.tsuchiura.lg.jp/page/dir000378.html>

1~5ページのタイトルバック(背景)は、博物館2階庭園展示です。

2022年度春季展示は、2022年5月14日(土)~7月3日(日)となります。「霞」通巻第58号の刊行は、再開館後を予定しております。休館時期については、1ページおよびホームページ等でご確認ください。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます。(カラー版)